

おける嫌いな食べ物の質的变化に関する縦断研究. 栄養学雑誌, 71(6), 323-329.

安藤節子 (2006) 子どもの食事・食育・発達——食のいとなみがからだをつくる ところをつくる. 芽ばえ社.

長谷川智子・今田純雄 (2001) 食物嗜好の発達心理学的研究 (1) 幼児と大学生における食物嗜好の比較と嗜好の変化の時期. 小児保健研究, 60(4), 472-478.

平井良治・池田稔 (2012) 嗅覚・味覚はどのように発達するか. JOHNS, 28(3), 270-271.

池谷真梨子・柳沢幸江 (2015) 乳幼児の手づかみ食べの発達過程および類型. 小児保健研究, 74(6), 884-895.

今田純雄 (1997) 学習・動機づけの観点から. 今田純雄 (編著) 食行動の心理学, 69-92. 培風館.

河原紀子 (2009) 保育園における乳幼児の食行動の発達と自律. 乳幼児医学・心理学研究, 18, 117-127.

河原紀子 (2017) 乳幼児の食行動の発達と偏食. チャイルドヘルス, 20(2), 21-23.

風見公子 (2022) 親子間における「食」の意識. 保健の科学, 64(11), 742-747.

こども家庭庁 (2023) こども基本法. https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/40f97dfb-f13-4434-9ffc-3f4af6ab31d5/51bee5de/20230401policies-kodomokihon-06.pdf (2024年1月3日アクセス)

厚生労働省 (2016) 平成27年度乳幼児栄養調査結果の概要. <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000134208.html> (2023年12月18日アクセス)

Llewellyn, C., & Syrad, H. (2018) Baby Food Matters: What science says about how to give your child healthy eating habits for life. (ルウェリン, C. サイラッド, H. (著) (2019) 上田玲子 (監修) 須川綾子 (訳) (2019) 人生で一番大事な最初の1000日の食事——「妊娠」から「2歳」まで, 「赤ちゃんの食事」完全BOOK. ダイアモンド社).

蓑原美奈恵・矢倉紀子・笠置 綱清 (1990) 幼児の味覚識別能に関する研究. 小児保健研究, 49(5), 553-558.

蓑原美奈恵・矢倉紀子・笠置綱清 (1991) 幼児の味覚識別機能に関する研究 成長による変化. 日本公衆衛生雑誌, 38(4), 272-277.

根ヶ山光一・外山紀子・河原紀子 (2013) 食育をめざす・食育を超える. 根ヶ山光一・外山紀子・河原紀子 (編著) 子どもの食・食育を超える. 東京大学出版会.

英語要旨は25ページに掲載

1-5.

野村真利香 (2022) 子どもの「持続可能で健康的な食事」に関する国際潮流. 小児科臨床, 75 (6), 1013-1019.

農林水産省 (2005) 食育基本法. <https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/attach/pdf/kannrennhou-20.pdf> (2024年1月3日アクセス)

農林水産省 (2021) 第4次食育基本計画. <https://www.mhlw.go.jp/content/000770380.pdf> (2023年9月25日アクセス)

小川雄二 (2022) おいしく食べる味覚と嗜好の発達. 室田洋子・小川雄二 (共著) 偏食・少食・野菜いやいや. 芽ばえ社, 77-94.

岡本洋子 (2012) 生体的反応としての味感受と文化的社会行為としての味理解の双方からみた1-2歳児の味行動. 日本家政学会誌, 63(1), 3-13.

志村剛 (1997) 神経科学・栄養生理の観点から. 今田純雄 (編著) 食行動の心理学, 培風館, 20-40.

武井啓一 (2013) いま味覚 (五感) 教育が必要なわけ——五感磨き (五感の知識・意識とトレーニング) のすすめ. 日本味と匂学会誌, 20(2), 133-142.

田中昌人・田中杉恵 (1984) 子どもの発達と診断3. 大月書店.

田中昌人 (1987) 発達保障の発達理論的基礎. 田中昌人・清水寛 (編) 発達保障の探究. 全国障害者問題研究会出版部, 141-179.

多々納道子・小方美穂・植田遙菜 (2014) 大学生の幼児期の振り返りからみた野菜嫌いの克服法. 鳥根大学教育臨床総合研究, 13, 97-110.

寺川志奈子 (2020) 2～3歳の発達と発達診断. 白石正久・白石恵理子 (編) 新版 教育と保育のための発達診断 下, 98-122.

外山紀子 (2008) 発達としての共食. 新曜社.

内田則彦 (2021) 特集 子どもの栄養——未来を見据えて 小児の肥満・やせをめぐる諸問題 貧困問題, 国際比較を中心に. 小児内科, 53(11), 1844-1848.

UNICEF (2020) 世界子供白書2019 (日本語版). 公益財団法人 日本ユニセフ協会. <https://www.unicef.or.jp/sowc/2019/> (2023年9月25日アクセス)

安田直史 (2019) 子どもの栄養～人生最初の1000日の意味～. 目で見えるWHO (日本WHO協会), 69, 2-5.

横尾暁子 (2022) 子どもの「食」と発達. 保健の科学, 64(11), 738-741.



子どもの食と発達保障

発達障害等の発達特性を有する子どもの食の困難と発達支援

田部 絢子・高橋 智

要旨 本稿では発達障害等の発達特性を有する子どもの食の困難の動向と発達支援のあり方を検討してきた。第一に、食物選択性 (偏食) の背景にある発達障害当事者が抱える「不安・緊張・恐怖・ストレス」等を丁寧に検討し、食における「安心・安全・信頼」を構築していくことが不可欠である。第二に、食の困難を有する発達障害当事者がどのような支援を求めているのかについて、丁寧に傾聴することが最適なアプローチになる。第三に、食の困難を抱える当事者・保護者・家庭を孤立させずにエンパワメントしながら支えていくシステムの構築である。具体的には、子どもの食の困難と発達支援に関わる管理栄養士、栄養教諭、保健師、小児科医師、歯科医師、歯科衛生士、言語聴覚士、教師、保育士等の専門家が協働していく発達支援システムの構築が不可欠である。

キーワード 感覚過敏, 発達障害, 食の困難, 偏食・食物選択性, 発達支援

1 はじめに

私たちは「食べる」行為を繰り返しながら生命を維持している。特に成長・発達段階の子どもには身体をつくるために必要な栄養をバランス良く摂ることが重視され、そのため保護者には栄養バランスを考えた食事づくりを、子どもには残さず何でも食べることが求められてきた。子どもに「食べ物の好き嫌いが無い」ことは、健康な身体を育む健全な家庭であることの裏付けと考えられてきたといえる。

しかし、このことが「食べ物の好き嫌いがある」=「しつけや育て方に問題がある」と捉えられることの根拠にもなり、「食べ物の好き嫌いがある」のは苦手を克服できない子どもの「わがまま」であり、その「わがまま」を馴れられない保護者の放任・努力不足であると考えられてきた。

たべ あやこ 金沢大学人間社会研究域学校教育系
たかはし さとる 日本大学文理学部教育学科

「食べ物の好き嫌いがある」という困難は、子どもが家庭外で食事をするようになるとよりいっそう顕在化していく。とくに皆で同じ献立を食べる保育所・幼稚園や学校の給食場面において「食べられる食物が極端に少ない」「時間内に食べ終えることができない」といった事態に直面し、子ども本人と保護者を大いに困惑させている実態がある。

学校では給食も教育の一環として考えられており、「正しい食べ方 (正しい姿勢、箸の持ち方、主菜・副菜・汁等を順序良く食べる『三角食べ』、よく噛むなど)」「好き嫌いをせずに残さず食べること」「みんなと楽しく味わうこと」などが指導される。しかし、感覚過敏や身体の不器用さ等の発達特性を有する子どもは、食べられない食品が多い、箸を上手に使えない、咀嚼・嚥下をスムーズにできない、味が混ざることが顕著に苦手である等の食の困難を有することが多い。

例えば発達障害を有する高校生は、学校給食の際に「『食べられない』と主張しても、『わがまま』だと聞いてもらえず、人前で食べることが次